



IFES Issues and Analysis - NO.92 [2020-04] Jun. 15, 2020

南北共同宣言の現在的な意味と課題



李寛世
慶南大極東問題研究所長
kslee712@kyungnam.ac.kr

「十年一昔」という。しかし、「南北関係」においては通用しないようだ。2000年6月15日、南北の首脳は長期間の冷戦や敵対、行ったことのない道への懸念を乗り越え、歴史の大転換を成し遂げた。そして「6・15南北共同宣言」と宣言による「平和」という時代精神の大切な結果をつくり出した。しかし、20年が過ぎた今日、朝鮮半島と南北関係を見れば、もどかしいばかりである。北朝鮮は、ピラ散布への対応として南北首脳間のホットラインを含む全ての連絡チャンネルを遮断し、「対韓事業を徹底して対敵事業に転換すべきだ」と強調した。北朝鮮がピラ散布への最初の措置として取った南北間の対話の断絶が現実化し、追加措置として言及した「9・19南北軍事合意」も破棄の危険にさらされている。

「6・15南北共同宣言」が切り開いた新しい時代以降、南北関係が進展と後退を繰り返すなか、「6・15南北共同宣言」が持つ意味は多くの部分が忘れられ、色があせてしまった。2020年、南北は75年間の対決と対立の歴史を終わらせ、和解・平和・繁栄の未来へ向かって進むのか、それとも不信・反目の過去に戻るのかの転換点に立たされている。従って、現在の南北関係が抱えている問題を冷静に直視し、賢明に克服することが南北関係の重要なモメンタムになる。このような問題意識に立って、ここでは「6・15南北共同宣言」の意味を再吟味し、それを踏まえて、南北関係の方向性とビジョンを提示できる実践課題について考えてみたい。

「6・15南北共同宣言」の現在的な意味と課題

「6・15南北共同宣言」が内包する最も大きな価値と意味は「平和」である。20年前の6月、分断後初めて南北の首脳が会い、互いへの理解を深めて政治的な信頼を構築した。これに基づき、朝鮮半島に二度と戦争が起きてはならないという確固たる共感を確認した。安否脅威を解消するための措置などが含まれた両首脳の合意は南北の偶発的な衝突の可能性を低下させ、朝鮮半島の軍事的な緊張を緩和させる効果をもたらした。その後、「10・4宣言」「4・27板門店宣言」「6・12北米共同宣言」「9・19平壤宣言」につながる首脳間の約束を通じた平和定着の努力が続いてきた。こうした努力は「朝鮮半島平和プロセス」を通じ、相当部分が具体化した。南北の実質的な不可侵宣言となった「9・19軍事合意」が紆余曲折を経ているが、現在まで南北は履行に取り組んでいる。すなわち、朝鮮半島平和プロセスは進展していないが、再稼働できる環境と平和の枠は依然として有効といえる。しかし、現在のような南北関係の断絶と悪化による「平和」談論の棄損は過去と質的に異なる朝鮮半島の危機的な状況をもたらしかねない。その上、新型コロナウイルスという非正常な環境の中、新たな悪材料が発生する場合、南北関係はさらに悪化し、相当困難な局面まで後退する可能性がある。従って、「6・15南北共同宣言」が作りあげた礎の上で持続可能で強固な平和を定着させなければならない。その始まりは、「9・19南北軍事合意」を徹底に履行することである。その延長線上で朝鮮半島における平和のための新しい解決策といえる「新朝鮮半島体制」の構築に向けた努力に集中する必要がある。新朝鮮半島体制は新しい平和協力共同体と経済協力共同体を両輪に政治・軍事分野と経済分野が相互作用・作動する体制である。南北間の軍事的緊張緩和と信頼構築の土台で経済協力の輪が回る際、対立、理念と左右陣営の時代は幕を閉じ、恒久的な平和定着の土台が形成される。

南北関係の改善のためには国際社会の認識とけん制も考慮しなければならない。2020年現在、米中関係が戦略的な対立状態に入り、競争・対立構図を明確に見せている。南北対立が続くことになれば、自国の利益を優先する米中の二大国が朝鮮半島の内部で対立を増幅させる原因となるだろう。そうなれば朝鮮半島は紛争の中心になる可能性があり、平和定着の条件・環境づくりには一切役立たない。こうした状況では「新朝鮮半島体制」の中核である朝鮮半島の非核化・平和体制の構築は一層困難になるだろう。いまこそ20年間変化した国際関係と朝鮮半島を取り巻く環境を考慮しつつ「6・15南北共同宣言」の精神を活かす時期である。南北は米中の戦略的競争の中、自律的に南北関係の改善に向けた創意的な発想と持続的な関係改善の努力を通じ、平和体制の定着を実現しなければならない。

温故知新を通じた出藍之誉

南北関係が進む道を一言で表現すれば「温故知新」を通じた「出藍之誉」となる。南北の当局者は20年前を考えて初心に戻り、南北関係で大胆な決断をしなければならない。数々の困難の中で大きな方向を失うことなく、少しずつではあるが、南北関係が発展してきたのは、「6・15南北共同宣言」という強固な礎があったゆえに可能であった。「6・15南北共同宣言」の与えた暫定的な可能

性と交流・協力、出会いといった資産を教訓にすべきである。対北朝鮮制裁と圧力、関係の断絶などを克服できるのは連帯と協力が唯一の道である。関係の進展が停滞し、断絶されることは対立の溝をさらに深めてしまうだけである。

宣言から20年を迎え、南北の当局がより柔軟かつ大胆な姿勢で変化と協力の道へ出ることを望む。

[MORE ARTICLES](#)

—上記の研究所の公式な立場を示すものではありません。

—メーリングリストに登録をご希望の方はお名前や電子メールアドレス、所属先を下記のメールアドレスまでお送りください。 ifes@kyungnam.ac.kr

You can remove your email address from our mailing list by clicking link below

[\[No longer receive e-mail\]](#)



경남대학교 극동문제연구소
The Institute for Far Eastern Studies

COPYRIGHT(C) 2010 IFES ALL RIGHTS RESERVED
2(Samcheong-dong) Bukchon-ro 15-gil, Jongno-gu, Seoul 110-230,
Republic of Korea
TEL. +82-2-3700-0739 FAX. +82-2-3700-0707
EMAIL. ifes@kyungnam.ac.kr